

## 大塚君とむらひの日に

著者	高木, 市之助
雑誌名	龍南會雜誌
巻	168
ページ	139-139
発行年	1918-12-25
その他の言語のタイトル	大塚君とむらいの日に
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6859">http://hdl.handle.net/2298/6859</a>

# 大塚君とむらひの日に

教授 高木市之助

いく百のころあつまりひしくといだきしめたりいたましき君を。

『もうい』とをどつひは云ひきおごそかに今は黙しぬまたおごそかに。

靈前の友のことはときれつゝたふとくありけりありのまゝにて。

そのいのち『死ぬる死ぬる』とさけびたるたゝかひのあとのけふのしづけさ。

たゝかひは清くさみしき君ゆねにいとごはげしくたゝかはれけむ。

癒ね果てばぎりしや語やらうとつぶやきていく日もあらぬに。なにのぎりしや語。

なにうらむとは無けれども人の死のいきどほろしくたへられぬかも。

君を思ひわれを思ひつぬかるみを歩いて来れば日は暮れにけり。

—(七十二六)—

月 似 古

春 野 晚 翠

世々を経て人はふりにし宿たによ昔ながらの月はすみける。

遠 島 月

和だの原はるけき島の山の端にかゝるかがみの秋の夜の月。